「十字架の証人」

マルコによる福音書１５章３３－４１節

森島 牧人 牧師

先回私たちは、主イエスが十字架の上で息を引き取られるという、主イエスの受難の中の最も重要な記事の前半の部分を学びました。全地が暗くなった中で「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。」と大声で叫ばれた主イエス。この敗北としか思えない言葉が実は詩篇２２にある＜神の言＞で、神こそ救いだと続く神への讃歌であること、また、主イエスの死と同時に神殿の幕が真っ二つに裂けたのは、主イエスの十字架の死によって人と神との通行が可能になったのであること、そしてそれは、主イエスの神の言による叫びへの天からの答えであったことなどを知ることとなりました。

そして、今日はその後半となります。この後半にも主イエスの十字架の死についての重要な物語があります。聖書には「イエスは大声を出して息を引き取られた。すると、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。百人隊長がイエスの方を向いて、そばに立っていた。そして、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、『本当にこの人は神の子だった。』と言った。」（マルコ１５：３９）とあります。主イエスが息を引き取られ、幕が裂けたその時、十字架上で死なれた方が誰であったかを理解し、それを口にした人がいたというのです。しかもその人は神の民・ユダヤ人ではなく、ローマの百人隊長という異邦人でした。誰もが予想出来なかったこの場面を記者マルコが聖書の中に記録したのは、この場面が、主イエスの十字架の出来事を証明するもの以外の何ものでもなかったからです。

マルコ福音書は、「神の子イエス・キリストの福音の初め。」という言葉で始まっています。主イエス・キリストの喜びの言葉がここに始まったと書き出されたこの福音書が、その最後のところで、異邦人である百人隊長に「本当にこの人は神の子だった。」と言わせている、つまり初めから一貫して福音を書いて来たマルコ福音書は、何と異邦人による「主イエス・キリストは神の子である」とのはっきりとした告白で、その最後を結んでいるのです。これは、異邦人によるキリスト告白が、この主イエスの十字架の死に於いて達成されたということを明白に示すものです。聖書にその言葉が書き記されたことによって、私たちを含む代々の教会は、それを聖書の言葉・神の言葉として受け止めて来たのです。百人隊長が告白の言葉を発した時、ユダヤ人はさぞかし驚いたことだったでしょう。というのも主の弟子たちはすべて逃げ去っていて、主イエスの十字架の死の意味を理解する者など誰もいないと思われていたその時、思わぬところから「本当にこの人は神の子だった」と言う声が起こったからです。つまり、聖書が証しする神の子イエス・キリストの告白が、異邦人の口を通してなされたのです。つまり、このことによって私たち教会も信仰の告白をすることが出来るようになったのです。

この後半にはもう一つの物語があります。男の弟子たちは皆逃げ去りましたが、女の弟子たちはずっと主の近くにいました（同１５：４０・４１）。記者マルコは、当時の社会では人数として数えられない無力な存在であった人々が、主イエス・キリストの信仰告白の最後の証人になったと書いています。彼女たちは主の十字架の死の証人になったばかりでなく十字架から復活に至るまで、主イエスのすべてに於いて、その「福音」の証人としてそこにいたのです。つまり、異邦人の百人隊長と社会的弱者の婦人たちが主イエスの最後の一番大切な場面の証人になったと、マルコ福音書は言っているのです。

マルコ福音書のこの十字架の記事は一見単純で素朴な記事に見えますが、よく読むと真に巧みに書かれていることが分かります。先ず詩篇の言葉で主イエスの叫びを語り、神殿の幕（小道具）が裂けるのを見せ、また異邦人の百人隊長を登場させて主イエス・キリストを告白させる、そしてそれらすべてのことの証人として多くの婦人たちがそこにいる・・・どれもが予想外であるそれらの事柄によって、主イエスの惨めな死の証拠とその意味が立てられ、私たちはそれを神の言葉としていただいているのです。

主イエス・キリストの出来事がそのような出来事として聖書の中に書き残されていることを、私たちは忘れてはなりません。私たちが異邦人の百人隊長や婦人たちのように人の数に入れられない者であったとしても、主の苦しみ、主の十字架の死の証人になることが出来るということです。主イエスの出来事の中の頂点にあるこの出来事が、そういう意味を持つ物語として今も私たちに伝えられていることを、しっかりと受け止めて行きたいと思います。

（説教要約　羽入田悦子）